

# ミューズ 第52号

## 平和のための博物館市民ネットワーク通信

編集委員：福島在行／編集協力：安齋育郎・山根和代

発行者：平和のための博物館市民ネットワーク

発行日：2023年6月25日

連絡先：[musejapankyoto@gmail.com](mailto:musejapankyoto@gmail.com)

翻訳：山根和代

イラスト：戸崎恵理子& Pegge Patten

### 英文通信Muse Newsletter 第50号到達特集

※平和のための博物館市民ネットワークの通信『ミューズ』英語版が次号で第50号を迎えます。50号到達を祝ってメッセージが寄せられましたので、日本語版『ミューズ』でもその紹介をします。またウェブサイト上で通信『ミューズ』を探しにくい状況にあるため、探し方・読み方も紹介します。(福島)

### 英文通信“Muse Newsletter”第50号に

山根 和代 (国際平和ミュージアム専門委員)

ミューズ・ニュースレターは、1999年に大阪と京都で開催された第3回平和博物館国際会議後に創刊されました。以来、日本語版、英語版ともに年2回発行しています。(2022年以来、年4回発行)元国際平和ビューロー事務局長のコリン・アーチャー氏から、2003年9月に発行された「ミューズ・ニュースレター第9号」の写真が、他の平和資料とともに送られてきました。この資料がブラッドフォード大学に存在することは心強いことです。

現在、1999年から2023年までのミューズ・ニュースレターの全ファイルが、以下のようにオンラインで公開されています。

1 平和のための博物館市民ネットワークの公式ホームページ  
現在制作中です。近日公開予定

2 安齋科学・平和事務所ホームページ

安齋科学・平和事務所のホームページ <https://asap-anzai.com/> で公開されています。トップページのカテゴリーから「Muse: Newsletters of the Citizens' Network of Peace Museums 平和のための博物館市民ネットワーク」をクリックします。



Muse Newsletter No.9

(1) 日本語版を読むには

「ミューズ 平和のための博物館・市民ネットワーク通信のすべてのファイル(All issues: Japanese version)」をクリックし、「ログインせず進む」を選び、「表示」を推してください。1999年から最新号までがPDFファイルでダウンロードできます。

(2) 英語版のMuse Newsletterを読むには

「Muse: All issues (English)」をクリックし、「ログインせずに進む」を選び、「表示」を推してください。1999年から最新号までがPDFファイルでダウンロードできます。

日本の平和ミュージアムに興味のある方は、上記のリンクから、平和ミュージアムを通じた平和教育などの活動を知っていただければと思います。

なお日本語版の通信ミューズは、52号となりました。

## MUSEニュースレター50号へのお祝いのメッセージ

ピーター・ヴァン・デン・ドゥンゲン(Peter van den Dungen)

INMPニュースレター前編集長

MUSE日本語版の第50号は、何のコメントもなく発行されたようです。英語版MUSEは、翻訳・編集作業の関係で、いつも少し遅れて発行されているようです。このことは、平和ミュージアム市民ネットワーク(JCNMP)が年2回発行している英語版の意義について、少し考えてみる機会となりました。MUSEは2022年3月から年4回の発行が始まりました(第45号)。

英語版『MUSE』は1999年7月に創刊され、12月に第2号が発行されました。その後、MUSEは年2回の定期刊行となりました。山根和代がこのニュースレターを創刊し、25年間ずっと編集長を務めてきました。2006年(第15号)からは、安齋育郎と山辺昌彦が共同編集者として加わりました。2018年(第36号)からは、後者は編集メンバーから外れています。最近、福島在行が加わりました(49号)。

MUSEは、日本平和博物館会議に加盟する広島、長崎、沖縄などの大規模な平和博物館からのニュースも掲載していますが、第一義的には、平和のための博物館市民ネットワークの機関紙として機能しています。JCNMPは1998年に設立され、市民やボランティアによって設立され、運営されている博物館を中心に構成されており、民間が設立し、資金を提供されている博物館も含まれています。

JCNMPは1998年に設立され、民間の博物館を含め、市民やボランティアによって設立され、運営されています。私がこれまで幸運にも訪問し、印象に残っている博物館には、「草の家」平和平和資料館、ひめゆり平和祈念資料館、丸木美術館、岡まさはる記念長崎平和資料館、佐喜眞美術館、東京大空襲戦災・資料センター、wam、第五福竜丸展示館などがあります。

MUSEのページを通じて、これらの美術館や博物館の館長や学芸員から寄せられたニュースを知ることが、いつも本当に楽しいことです。また、小規模な博物館の多くが、不安定な財政状況、創設者の死去、ボランティアへの依存、極端なナショナリストの反対や脅迫など、様々な要因から、存続するだけでなく、リニューアルや拡大にも成功したことを知って、安心しました。MUSEには、JCNMPや関連する平和団体の会議や会合、ワークショップや講演会、来場者の感想、新刊、平和のモニュメントや記念碑などの報告も含まれています。このように、日本の平和博物館・平和美術館に関するあらゆる情報を網羅した、ユニークで貴重な情報源となっています。

2019年12月に第40号を発行した際、編集部は「母国語（日本語）と国際語（英語）の両方で定期刊行物を発行することは、世界でも類を見ないかもしれない挑戦である」とコメントしています。この挑戦は、山根和代を長年にわたって支えてきた数名の翻訳者の献身的な努力によって達成され続けています。現在では、翻訳ソフトの普及により、その作業は多少なりとも緩和されつつある。

『MUSE』50号の情報量は膨大であり、貴重な情報源（インスピレーション源！）である。すべての号は、<https://aki.teracloud.jp/sbrowser/#https://aki.teracloud.jp/ds/dav/11b29733c7ea26a1/> から自由にアクセスすることができます。研究を容易にするために、平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）のニュースレター35号の索引が、ボランティアの努力によって作成されたように、包括的な索引が利用できれば最も望ましいでしょう（<https://sites.google.com/view/inmp-museums-for-peace/newsletters/newsletters-2011-2021> 参照）。

MUSEとその英語版の制作に携わったすべての方々、翻訳者、イラストレーターの方々、そして特に山根和代さんと安齋育郎さんには、長年の地道な努力に感謝し、心から祝福を申し上げます。

## クライヴ・バレット博士からのメッセージ

平和博物館（英国・ブラッドフォード）評議員会議長

Muse50号、おめでとうございます！平和のための博物館市民ネットワークは、世界中の平和ミュージアムに携わる私たちに、インスピレーションを与えてくれる存在です。ミュージアのニュースレターの翻訳を読むことができることで、私たちのつながりの感覚は大きく向上しています。Museの発行に携わったすべての方に感謝します。そして、市民ネットワークのみなさん、よろしくお祈りします。

平和と連帯のために

## エリック・ソーマルズ(Erik Somers)博士からのメッセージ

オランダの歴史学者・NIOD（オランダ戦争・ホロコースト・ジェノサイド研究所）主任研究員

日本では、ここ数十年の間に多くの平和博物館が設立され、印象的な全国的ネットワークが形成されました。興味のある外国人の同僚や研究者にとって、これは非常に興味深い展開です。日本では、戦争と平和の過去を記憶し、それに対処することにどのような意味があるのかを物語っているのです。ミュージアムは、こうした活動や展開について情報を得るための優れた情報源です。美術館や博物館が、そのプレゼンテーションや、さまざまな活動を通じて、どのような意味を与えているかがよくわかります。そのため、毎回英語版が発行されるのは大変ありがたいことです。私は、発行されるミュージアムの新刊を毎回興味深く読んでいます。世界へ開かれた窓です。これを可能にしているすべての人に感謝します。50号おめでとうございます！

## ミュージアム50号の発行、おめでとうございます。

ジョイス・アップセル（ニューヨーク大学教）

ミュージアムの現編集者、歴代編集者の皆様、おめでとうございます。私の同僚であり、Museの編集者である山根和代を通して、私はMuseを読む機会を得ました。そして現在進行中の重要な活動について

学ぶ機会を得ました。この重要な情報を、学生や他の人たちと共有することができました。この大切な節目に、ミューズ・ニュースレター50号を発行し、改めておめでとうございます。

これからも平和のための大切な活動を続けてください。

ジョイス・アプセル



Lunch bag project: "He Will Cover You" by Peggy Patten in the USA in 2020

## 平和のための博物館市民ネットワーク活動紹介

### 2023年度第1回学習会の実施報告

平和のための博物館市民ネットワーク2023年度第1回学習会を次のとおり開催しました。

- ・講師：安齋育郎さん（安齋科学・平和事務所（ASAP）所長）
- ・演題：「ウクライナ戦争を見る視点」
- ・日時 2023年5月14日（日）14:00～15:30

今回の企画は次のような趣旨で開催されました。「企画趣旨 ウクライナ戦争の開戦から1年以上が経過しますが、終息の気配は見えません。現代を生きる者としてこの問題とどう向き合えばよいのか、現代の平和博物館を関わる者としてどう向き合えばよいのかは喫緊の課題です。この問題に関し、安齋育郎さんは、日本国内ではほとんど報道されない、開戦前の米国やNATOの動向等にも注目し、発言をされています。ウクライナ戦争を多面的に見るための場として、今学習会を設定します。」

参加者は約40名でした。

講演の後日配信は行いませんが、当日の安齋さんの報告内容は『新版 安齋育郎のウクライナ戦争論』に収録されています。ご希望の方は安齋科学・平和事務所のウェブサイト <http://asap-anzai.com/> をご確認ください。（文責／福島在行）

## 平和のための博物館 活動紹介

### 中帰連平和記念館

芹沢 昇雄

中帰連（2002年解散）は自ら戦犯として6年間収容された「撫順戦犯管理所」の中庭に『謝罪碑』を建立（1998年）しています。また中帰連千葉支部も匝瑳市の妙福寺の境内に『中帰連碑（謝罪碑）』を建立しました。この『中帰連碑』はまだ「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」も「記念館」もなく、中帰連千葉支部の皆さんが、自分たちの体験と想いを後世に伝えるために1997年に建立しました。

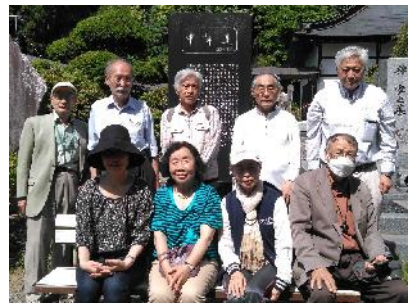
しかし、碑文を読むと何処からも設置を断られてしまいました。最後に、この妙福寺の檀家総代をしていた篠塚良雄さんが、お寺に相談し了解を得られたのです。

私たちは毎年、境内の藤の花の咲く頃の5月5日に『観藤会』と称し、都内や埼玉など各地から碑の前に集い、中帰連の皆さんを偲び、心を新たにす場としています。

今年も「記念館、受け継ぐ会」の仲間の他に「日中友好協会千葉支部」など10人が参加しました。近くにお住まいの篠塚さんのお嬢さんも参加下さり、普段「碑」の管理もして下さっています。

731部隊によりマルタと称された被害者全員が殺害されたため、731部隊の少年隊員として勤務していた篠塚さんの証言は貴重でした。

当日は庫裏で在りし日の篠塚さんの「証言映像」を観たり、篠塚さんや中帰連の思い出話などで交流しました。



### 平和をつくり発信する ピースあいち朗読の会「オリーブ」

丸山 豊（ピースあいち所属）

ピースあいちは、多くのボランティアの活動によって支えられています。その一つに朗読の会「オリーブ」があります。「文学作品等を人の声で他者に聴かせる」という活動です。

文学作品から戦争体験の手記まで含め「平和が大切であること」を読み手がしっかりと把握して生の声で伝えたい、これが目的です。2016年9月に結成され、現在約8名ほどが活動しています。

今までに朗読された作品の一部を紹介します。

「ちーちゃんのかげおくり」（あまんきみこ）、「一本の鉛筆」（松山善三）、「おとなになれなかった弟

たちに」(米倉齊加年)、「父の列車」(吉村康作)、「おかあさんの木」(大川悦生)、「にんげんをかえせ」(峠三吉)、「生ましめんかな」(栗原貞子)、「野ばら」(小川未明)など書き切れません。

発表の場は、ピースあいちに留まらず「あいち平和のための戦争展」、私学「愛知サマーセミナー」から映画「にんげんをかえせ」の上映会場(生協会館)などに広がり幅広い運動になってきました。

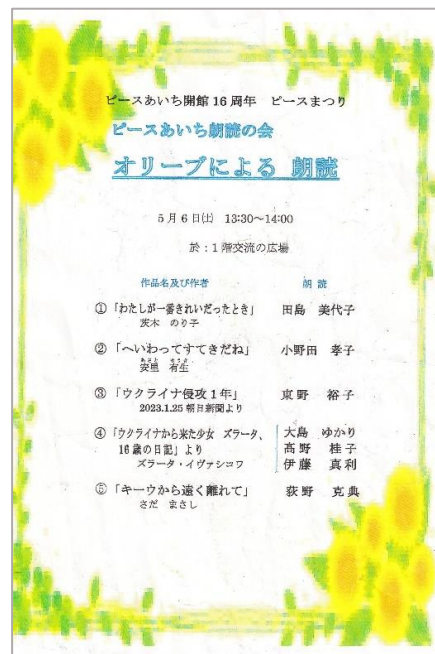
本年5月6日に開催された「ピースまつり」では、この「オリーブ」が注目を浴びました。

#### 《当日のプログラム》

- ①「わたしが一番きれいだったとき」(茨木のり子)
- ②「へいわってすてきだね」(安里有生)
- ③「ウクライナ侵攻1年」(2023.1.25 朝日新聞記事)
- ④「ウクライナから来た少女 ズラータ、16歳の日記」より
- ⑤「キーウから遠く離れて」(さだまさし)

今回の特色は文学作品以外の朗読も取り入れた構成にあります。朝日新聞記事、ウクライナ少女の日記は聴く人を現代世界に引き込みました。最後はさだまさしの歌を、メンバーの一人がピアノ伴奏とともに歌いあげ、感動のうちに幕をとじました。

ボランティアが自ら平和を発信するこの朗読の会「オリーブ」は、平和博物館の新しい「平和のつくり方」としても評価できるのではないのでしょうか。



## 第10回戦争遺跡保存四国ネットワークシンポジウム・見学会を 土佐清水市で開催(6/3、4)

平和資料館・草の家 出原 恵三

コロナ禍で中断していた戦跡保存四国シンポを4年ぶりに土佐清水市中央公民館で開催しました。四国内で空襲の語り部活動や戦争遺跡の調査に従事している5名が近年の取組みの成果や課題についての報告、遺跡見学を行い、市民や研究者、学生等延80余人が参加し戦争の記憶継承への思いを新たにしました。

1日目のシンポでは①「語り継ぐ徳島大空襲」、②「学校日誌に見る昭和20年終戦前後の記録を通して」、③「8・15戦争体験を伝える集い実行委員会の今までとこれから」、④「発掘された今治の戦災」、⑤「香南市の戦争遺跡と保存」と題して報告がありました。①では「体験者の減少、戦跡の消滅」により継承の難しさ、ガイド養成の必要性が語られました。②では、「学校日誌」は警戒警報・空襲警報が頻発された状況などが克明に記された「価値ある記録」であり保存・活用の必要性が訴えられました。③は公立の「平和資料館」建設への取組み、『えほん高松空襲』の刊行、7月4日午前2時56分の空襲開始時刻に合わせた空襲跡見学会などの取組について、④・⑤は自治体職員による戦争遺跡の発掘調査事例、文化財として保存された戦争遺跡、展示会の紹介などが行われました。

2日目の見学会では、土佐清水市街地近傍に残る旧海軍の水上特攻「第132震洋隊」基地跡に残る13基の横穴壕や足摺半島の「沿岸監視哨」跡、「足摺望楼」跡、疎林の中に残る「レーダー基地」跡を見学しました。基地建設の経緯や当時の状況、ここでも朝鮮半島からの労働者が強制動員されていたことなどが説明されました。碧い海と空、足摺半島は四国の観光スポットとして有名ですが、近代日本の戦争の爪痕が数多く刻まれているところでもあります。再びここに戦争遺跡を作らせてはなりません。



旧陸軍「レーダー基地」跡  
（「警戒機乙」の基礎）の見学

## ひめゆり平和祈念資料館

学芸員 前泊 克美

### 新ガイドブックを刊行しました

2023年3月30日に新ガイドブック『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック 展示と証言』を刊行しました。

2021年の展示リニューアルでは、イラストや写真など見て分かる展示を増やすなど「戦争からさらに遠くなった世代」に伝わる展示を目指し工夫を行いました。新しいガイドブックは、ページをめくるとリニューアルした展示の印象がよみがえるような1冊となっています。展示のイラストや写真、図版、テキスト、元ひめゆり学徒の証言（大型証言本）などほぼすべてを掲載しました。修学旅行の事前学習や平和学習にも活用できます。

19年ぶりに刷新したガイドブックを、ぜひ多くの方にご覧頂ければと思います。

\*2,500円（税込）、A4横、144ページ：当館で販売しています。郵送でのご注文には送料、振込手数料がかかります。ひめゆり資料館（098-997-2100）までお問い合わせください。



### 前理事長本村つるが逝去しました

2023年4月7日、前理事長本村つるが逝去しました。

本村は、1945年の沖縄戦の際、19歳でひめゆり学徒隊として動員されました。学徒隊本部員として、本部からの連絡を各壕に伝えることや学友たちの状況を確認することなどが任務で、学友の最期を看取することもありました。

解散命令後、戦場をさまよううちに、後輩が被弾し重傷を負い動けなくなりました。砲爆撃が激しくその場にとどまることができなかつたため、あとで迎えに来るから、と声をかけその場から離れましたが、戻ることはできませんでした。本村は、戦場に後輩を置いてきてしまったことを、終生悔やんでいました。

教職退職後、ひめゆり平和祈念資料館の設立や開館後の館運営に携わりました。7代目財団理事長、

5代目資料館長などを務め、沖縄戦の継承や次世代の後継者育成に取り組みました。元ひめゆり学徒や職員にとって大きな支えでもありました。

沖縄戦当時10代後半だった生存者は90代後半となり、訃報が届くことが増えました。彼女たちの戦争体験や思いを次の世代に伝える努力をする必要を、改めて感じています。

※資料館だより71号に館長普天間の追悼文を掲載しました（今後ホームページに掲載予定）

## 岡まさはる記念長崎平和資料館

理事長 崎山 昇

資料館では、4月2日「第6回高實康稔さんを偲ぶ会」を開催し、東京や関西などからも含めて25人が参加しました。初めに生前の初代理事長高實さんを映像で振り返り、その後高實さんが初代代表を務めた「市民運動ネットワーク長崎」事務局長：門更月さんに生前の高實さんの思い出をお話いただき、参加者の皆さんと意見交換を行い、高實さんの遺志を継ぎ頑張っていくことを確認しました。4月15日には、昨年10月に開講した「もう一度学ぼう！日本の現代史講座第3期」の第7回（今期最終回）「日中国交正常化－日本人の「中国観」を再考する」を開催しました。現在10月から来年3月まで「第4期」開講へ向けて準備を進めています。

さて、昨年は「岡まさはる記念長崎平和資料館保全プロジェクト」にご協力いただき感謝申し上げます。第二次改善工事は無事に終了し、今年は、第三次改善工事の費用およそ600万円の一部を調達するためにクラウドファンディングなど「長崎平和資料館保全プロジェクト（第2期）」を計画しています。引き続き皆様のご協力をお願いいたします。



### 新規の活動紹介※

※次の2本は会員外の方への編集部からの執筆依頼による原稿です。

## 伊陸ロンサムレディ号平和記念館（柳井市伊陸旭）

武永 昌徳（記念館代表）

初めまして、記念館代表の武永と申します。以下、設立に至る経緯を取りまとめました。

1945年7月28日、呉（旧帝国海軍港）を空襲した爆撃機BB-24Lonesome Lady号は、迷走の果て山口県柳井市伊陸に墜落しました。乗員9名はパラシュートで脱出します。1名、墜落死。1名、降下後8日間山中へ隠れており、その後捕虜となり終戦後母国へ帰国。そして残りの7名は、降下後に捕虜となり広島の中隊司令部へ護送。その内の1人、機長のトーマス・カートライトは、重要参考人として東京へ送られたのち、戦後アメリカへ帰国しました。



広島に残った6名は、中国憲兵隊司令部に収監中、1945年8月広島に投下された原子爆弾により被爆死しました。米兵が被爆死したことは、長い間秘密とされていました。この事実は、ご家族へも知らされておられませんでした。広島で被爆死した米兵捕虜について40余年に渡り地道に調査研究を重ねてきた森重昭さんは、伊陸へ調査のため何度もお越しになられておりました。自らも被爆者でありながら、被爆死した方とご家族へ寄り添い思い埋葬の手続きを、何の見返りも求めず私財を投入し、突き進んでこられた方です。私は、そのことを文藝春秋の記事で知ったと同時に私の母らの世代が昔、「伊陸の平和の碑」の設立や森先生と機長のトーマス・カートライトさんとが一緒に伊陸へ再訪し交流をなされた記憶などが甦りました。これを機に森先生と私の交流が始まります。そして、この時期に、森先生のドキュメンタリー映画 (Paper Lanterns)の撮影時期とも重なり先生とは、次第に交流が深くなっていきました。



第二次世界対戦は、尊い人々の命が無惨にも失われました。この戦いから70年以上が過ぎた今日、世界では混迷と混沌が未だに拭えません。私は、森重昭先生とLonsome Lady号機長のトーマス・カートライト氏との長年にわたる交流の記録は、日米間だけでなく各国々の相互理解と信頼の上になり立つ平和の希求の手本として、世界に発信するべき事例となると確信し記念館の設立に至りました。記念館はまだ未完成です。みんなで育てる記念だと思っております。ここであった事実を学び合い、好転的な繁栄と繋がりへと広がるよう願いも込めて。よろしく願いいたします。

Facebook: [https://www.facebook.com/ikachilonesomepeace.memorial.base.B24/?locale=ja\\_JP](https://www.facebook.com/ikachilonesomepeace.memorial.base.B24/?locale=ja_JP)

## 市民の展示が暴いた「G7広島サミットの正体」

小島亜佳莉・金井良樹（地球的問題を考える広島人会）

5月7日からサミット最終日までの2週間、「地球的問題を考える広島人会」として展示「G7広島サミットの正体」を広島市中心部で開催した。展示の目的は、①サミットそのものの問題を改めて指摘し、「新植民地主義・新自由主義的なグローバリゼーション」に抗う世界規模の抗議運動を紹介すること、②広島サミットが、世界の権益を維持したい西側の核保有国や特権国による対ロシアの戦争会議であって、戦争の激化や核戦争を招くだけで何らの成果も期待できないこと、③サミット会場に選ばれた元宇品の「加害の歴史」を掘り起こすとともに、日本の侵略戦争や植民地支配の反省抜きに進められた広島サミットだからこそ裏側で強行された「徴用工『解決』」や「入管法改悪」などを批判することだった。

数万もの警察官が街を占拠する異常事態と、サミット歓迎の翼賛報道の洪水が同時進行する中で、展示会場は市民の学びの場になったと同時に、抗議運動に訪れる人々の貴重な情報交換や休息の場にもなった。

私にとっては、横浜の「平和のための戦争展」のパネル制作に関わって以来二度目の展示制作だったが、市民が大きな危機感に駆り立てられて作り上げる展示は、常設の展示とはまた違った切実さが

滲み出るように思う。今後は、今回の展示内容に期間中の写真や抗議運動のレポートなどを加筆した冊子を作成して頒布し、広島サミットに抗った市民の記録を残したい。



中国やフランスから来たプロテスターとの交流



展示会場で熱心に展示を見る来場者たち

## 時評・論考

### 平和博物館と国際政治

福島 在行（共同代表）

本号刊行の少し前の2023年5月19日から21日、G7広島サミットが開催されました。私は広島市内に住んでいますが、広島では開催前から大量の警官が警備に動員され、まるで戒厳下のような状態でした。G7広島サミット全体の評価についてはいろいろと考えねばならないこと、言及しなければならないことがあり、まとまり切らないので、ひとまず書きます。ここで私は、平和博物館に関連する少しの事柄を、記録の意味も兼ねて書いておきたいと思います。

広島をサミット開催地に選んだのは岸田文雄首相の強い希望とのことで、G7首脳に平和記念公園と広島平和記念資料館を訪問してもらうことにこだわってきたと報じられています<sup>(1)</sup>。開催一月前の時点でも、訪問の方向で調整しつつも難航していることが伝えていましたが<sup>(2)</sup>、5月19日、バイデン米大統領をはじめG7首脳の平和記念公園と平和記念資料館への訪問が（少なくとも表面的には）果たされました。

広島を訪れるならば平和記念資料館も当然見学すべきだという意見は、2020年代の現在では当然のように受け止められるかもしれません。しかし、広島の実情を伝えるのは何も平和記念資料館だけではありません。被爆者自身の声（今回は一人の被爆者が英語で直接に体験を伝えました）、公園内外の慰霊碑、被爆建造物（原爆ドームに限らない）、被爆樹木など、さまざまなモノが原爆被害を伝えます。けれどもその中で、平和記念資料館は特別に重要な意味を持つ、ということが、ある意味当然視されるようになったのが現在です。これは、戦争体験世代の減少とともに大きくなってきた感覚（あるいは言説）でしょう。その意味で、平和博物館の社会的価値は高まっていると認識されていると言えます。これは私たち平和のための博物館に関わる人間にとっては、ありがたいと思うと同時に責任を強く感じるどころです。

ところで日本の平和博物館は、とくに日本の戦争加害問題の取り扱いをめぐる国内政治的かつ国際政治的な緊張を強いられてきました。その意味で平和博物館は政治と切り離せず、一時期の学術研究で平和博物館が取り扱われる際はこのテーマが主流であり、その他の平和博物館の活動への目配りがあまりなかった程でした。それが今回のG7広島サミットでは、日本の加害ではなく、第二次世界大戦下での核兵器の使用をめぐる問題と現代世界での核兵器のあり方という、国際政治の焦点として広

島平和記念資料館という平和博物館が浮上してきました。アメリカだけでなくイギリスやフランス、つまり核兵器保有国が平和記念資料館見学に難色を示した、というのです。「ある政府関係者」の話では、「原爆資料館には原爆の惨状を伝える数々の展示物がある。その場所を首脳が訪れれば、いま核兵器を保有し抑止力を必要とし正当化している国の立場が揺らぎかねない、という懸念があるのだと思う」という話でした<sup>(3)</sup>。また、ある記事<sup>(4)</sup>も日本政府や外務省のアメリカへの配慮を指摘しています。

しかし、振り返って見るとアメリカは決して広島・長崎の原爆被害を知らない訳ではありません。占領期にアメリカが接収した原爆被害関連資料は、例えば米軍病理学研究所（AFIP）に保管されていて、1960年代から1970年代にかけて日本に返還されました。いまでは有名なきのこ雲の写真（バラのように横に広がっている雲の写真）もここに含まれています。また米軍が広島を撮影した写真は、例えば米国国立公文書館（NARA）に多く所蔵されています。これらには被爆者の戦後の声はあまり含まれていませんが、それについては日本国内で原爆体験手記類等がいくらかも刊行されており、米国政府の情報収集能力をもってすればはいくらでも入手可能です（貴重書はともかくとして、個人でも手に入るものはたくさんあります）。それが分かっているお核兵器保有国は核兵器に依存を続けて来ました。政治家が広島を訪れ、被爆者の声を聴き、平和記念資料館を見学して、強く心を動かされるということは、もちろんあると思いますが、それは人間個人としての話であり、それが政治家としての態度に直結するわけではありません。なので、今回のG7報道であらためてこのような核兵器保有国の懸念が報じられ、私は不思議に感じています。数十年にわたり「国防」の軍事的基礎を核兵器体系に置いて来た核兵器保有国の内情とはそんなに脆いものなのか、と。

ただ、この点は今回は深く触れないことにします。今回記録しておきたいのは、本当のところはどうであれ、広島平和記念資料館（という平和博物館）を訪問し展示を見学するということが外交上あるいは国際政治上の焦点であったという点です。G7サミットという国際政治上の一大イベントという機会であったこともあり、今回の件は特別な注目を集めた、という事情はありますが、平和博物館と国際政治という課題が、今回のG7であらためて注目を浴びたことを、ひとまず記憶しておきたいと思います。平和博物館に何ができるのかは、また別の機会に考えたいと思います<sup>(5)</sup>。

## 註

- (1) 「【解説】ここがポイント！G7 原爆資料館訪問の狙いは？成果は？」（『NHK政治マガジン』2023年5月19日、<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/statement/99287.html>、最終閲覧2023年6月18日）
- (2) 鬼原民幸、清宮涼、下司佳代子「原爆資料館、G7首脳にどこまで見せる？「米の立場危うくできない」」（『朝日新聞』2023年4月20日付 <https://www.asahi.com/articles/ASR4M6FF1R4FUTFK024.html>、最終閲覧2023年6月18日）
- (3) 「G7首脳 バイデン大統領ら広島原爆資料館へ 難航した水面下交渉」（『NHK政治マガジン』2023年5月22日、<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/feature/98879.html>、最終閲覧2023年6月18日）
- (4) 副島英樹「G7サミット 「貸し舞台」になった広島」（『AERA』第36巻第25号、朝日新聞出版、2023年6月5日）。  
「G7広島サミット、不都合な真実は徹底して隠された 原爆投下国「米国」への配慮」（『AERAdot.』2023年5月30日、<https://dot.asahi.com/aera/2023052900052.html?page=1>、最終閲覧2023年6月18日）としてウェブにも抄録されている。
- (5) なお平和のための博物館市民ネットワークとの関係で言えば、本ネットの会員向けメーリングリストに2023年5月10日付で投稿され紹介された広島の一つの展示を指摘しておきましょう。「G7広島サミットの正体」と題された市民の手によるパネル展示が2023年5月7日から21日まで、平和記念公園から歩いて数分の場所にある「ひと・まちプラザ」1階ロビーで開催されました。その記録は本号に小島亜佳莉・金井良樹「市民の展示が暴いた「G7広島サミットの正体」」として掲載されています。平和のための博物館の土台である市民自身の手による展示活動という意味では、このような活動も記録しておくことが大事になるでしょう。

## 韓国の「済州4.3事件」美術展と「慰安婦」問題

池田 恵理子 (wamアクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」)

### ■「済州4.3事件」との出会い

この4月3日、「済州4.3事件」の75周年記念追悼式典を挟んで開かれた「4.3美術展」に招かれて、韓国・済州島へ行った。「済州4.3事件」とは、戦後の東西冷戦期に済州島がアメリカ軍政下にあった1948年4月3日、朝鮮半島の南側だけの総選挙で南北分断を固定化してはならないとして、島民の一部が選挙反対の武装蜂起したのを機に、軍や警察によって7年間に島民の一割に当たる3万人が虐殺された痛ましい事件である。これは「韓国現代史・最大のタブー」とされて隠蔽され、事件を報じたり語ったりすれば拘束や拷問を受け、処罰された。虐殺の事実が公然と語られるようになったのは、韓国の民主化が実現した30年余りが経ってからである。2000年には「済州4.3特別法」が制定され、03年には国家権力の過ちを認めた政府の「真相調査報告書」が確定、盧武鉉大統領が公式に謝罪した。そして2008年、広大な「4.3平和公園」に「済州4.3平和祈念館」が開館し、事件の背景や真相究明の経過、この事件を描く絵画や彫刻、写真、映画などが展示されるようになった。今年の追悼式典には韓憲洙首相をはじめ1万5千人余りが参列、韓国と日本のメディアが取材に集まった。遺族会の会長は、「事件の資料を保存し公開するために、ユネスコの世界記憶遺産への登録を目指している」と述べた。

しかしなぜここに、ビデオ塾制作の日本軍の性暴力を証言してきた元兵士の近藤一さんの追悼ビデオが招かれるのか。昨年末、4.3平和財団から説明を受けたが、その意味はすぐには理解できなかった。私が主宰する「ビデオ塾」は「慰安婦」被害者や加害兵士の証言を記録してきた映像集団である。4月の訪韓までには「4.3事件」の記録や小説、映画などから情報を集めたが、判然としない。済州島の現地でアーティストや関係者と話をしてわかってきたのは、政治権力によって隠蔽された歴史を取り戻す取り組みだということだった。戦争加害の責任を認めて自らの慰安所体験や戦場強かんまで証言し、謝罪する近藤さんは驚嘆と敬意を持って受け止められていた。「4.3事件」では、加害者や責任者の証言集めは今後の大きな課題になっていた。「近藤一さんの26分のビデオを1時間近くに拡大・再編集してくれたら、済州島内の映画館で上映したい」とも言われた。そこで近藤さんの証言を増やし、中帰連平和祈念館の協力もいただき、中国の撫順戦犯管理所の元戦犯たちの記録や女性国際戦犯法廷で証言した元兵士たちを加えた拡大版を作って、済州島へ送ることにしたのである。

### ■タブーを解かれた「4.3事件」

「4.3美術展」のシンポジウムや追悼行事の合い間に会った人たちの中には、1978年という軍事独裁政権下で「4.3事件」を描いた小説『順伊(スニ)おばさん』の作者・玄基栄(ヒョン・キヨン)氏もいた。この本は直ちに発禁とされ、玄氏は拷問を受けて投獄されたが、今では「4.3事件」を語る第一人者だ。彼とは「国民」と「市民」の使い分けから、関東大震災での朝鮮人・中国人の虐殺問題、「慰安婦」を否定し続ける日本政府の愚かさ・・・などを語り合った。

『順伊おばさん』を日本語に訳した作家の金石範(キム・ソクポム)氏は、在日コリアンだったので1950年代から「4.3事件」を書き、20年以上かけて長編小説『火山島』を著している。彼は「記憶が抹殺されたところに歴史はない。歴史のないところに人間は存在しない。記憶をなくしてしまった人間は、屍のような存在なのだ」として、「4.3事件は“記憶の自殺”だった」と言っている。

報道規制されていたメディアは民主化で事件を書けるようになり、地元紙の「済民日報」は1990年から「4.3特別取材班」を立ち上げ、10年間連載を続けた。

昨年、「4.3事件」で追い詰められて日本と北朝鮮に引き裂かれた自分の家族を映画『スープとイデ

オロギー』で描いたのは、在日のヤン・ヨンヒ監督だった。彼女の母は18歳で恋人や家族を殺されて済州島から大阪に逃れてきたが、自分の娘に事件を語るようになったのは最晩年になってからだった。ヤン監督が通った大阪の朝鮮学校でも、この事件は教えていない。独裁政権によって忘却を強いられた記憶を掘り起こすことの大変さを、改めて知らされた。また、済州島における「記憶をめぐる闘い」が見えてくると、どうしても政権や歴史修正主義者たちによってタブーにされてきた日本軍「慰安婦」問題を考えずにはいられない。

## ■バックラッシュと闘う「慰安婦」の記憶と記録

日本軍は上海事変の頃から慰安所を開設しているが、その実態がわかってきたのはアジアの「慰安婦」被害者が名乗り出て証言するようになった1991年以降である。ここから10件の「慰安婦」裁判が始まったが、1997年を境に、『慰安婦』の強制連行の証拠はない」とする安倍晋三元首相ら歴史修正主義者と右翼によるバックラッシュが激化した。中学の歴史教科書から「慰安婦」の記述が消され、「慰安婦」報道は激減した。NHKの「ETV2001番組改変事件」のような、報道への政治介入も発生した。メディアには「慰安婦」を否定する政権に同調するか、忖度と自己規制で報道を控える傾向が強まった。

日本政府は、今や「慰安婦」のシンボルとなっている「平和の少女像」の設置計画を察知すると、官民一体となって撤去を求めていく。昨年12月にはアルゼンチンのブエノスアイレスで像の設置が中止になり、今年3月にはドイツのカッセル大学で像が撤去された。また、2016年、日本とアジアの被害国の市民団体が「日本軍『慰安婦』の声」をユネスコの世界記憶遺産に登録申請すると日本政府の妨害工作にあい、申請は7年経った今も棚上げ状態にある。このように、「慰安婦」の「記憶をめぐる闘い」は今も継続中である。

「慰安婦」問題は、日本が放置してきた戦争責任・植民地支配責任と戦後責任が問われる重要課題になっている。日本各地の「慰安婦」支援団体は右翼による妨害やいやがらせやマスコミによる無視・黙殺に抗いながら、国境を越えた連帯行動を続けてきた。こうした中で、「慰安婦」被害者は“不運で可哀そうな被害者”から“人権活動家”へと脱皮して、国連勧告や米下院、オランダ、カナダ、EU、韓国、台湾などでの議会決議の採択を促してきた。アジア各国には「慰安婦」資料館が次々と誕生している。

日本に生まれた私たちは“記憶の暗殺者”たちによる妨害をはねのけて、「慰安婦」問題に真正面から取り組むしかない。それがアジアの平和につながる道であり、日本における女性の人権確立を実現する道でもある。

「済州4.3事件」をめぐる政権と民衆の「記憶をめぐる闘い」の歴史を学ぶ機会を得て、政権に弾圧されてタブーとされた負の歴史を記録し記憶し続けることの重要性と、アジアでの市民連帯の大切さを再確認した。チェコの作家ミラン・クンデラが書いているように、「忘却を強いられる時の抵抗は記憶すること」であり、「民衆の武器は勇気・執念・記憶」なのである。



*erico*

## 反戦詩画人・四國五郎のこと

四國 光（四國五郎長男）

父四國五郎を一言で表すと、絵と詩を手段として、反戦平和活動と戦争の記憶の継承に人生を捧げた表現者、と言えると思います。息子の私から見ても見事な程、一途な人生でした。満洲でのソ連との死闘、シベリア抑留、そして帰国すると故郷広島は原爆で壊滅。そして最愛の弟の被爆死。「普通の」絵描きになる事を子供の頃から夢見ていた父ですが、戦争体験が父の一生を決定づけました。

「詩画人」と称されるのは、絵と詩を、ほぼ同じ比率で創り続けたためです。2014年に逝きましたが、ありがたい事にその後急速に「四國五郎再評価」の言葉がメディアにも見られるようになり、今年、死後だけで全国で28回目の展覧会が開催され、テレビ特番もNHKで死後3本も制作されました。

戦後、シベリアから帰国するや、朝鮮戦争下、GHQの言論統制に抗い広島で原爆詩人峠三吉たちと様々な活動を始めます。特にユニークなのは、今で言えばバンクシーのように、反戦、言論の自由を求めて街中に貼りだした「辻詩」（つじし）というポスター運動だと思います。全てが父の手描き、署名なし、複製もなしの、廃棄されることが運命づけられたポスター作品群。父が作品を仕上げると仲間若者たちが街に貼りだし、警察が来ると剥がして逃げて別の場所に貼りだす。いちごっこのようなアートによる反戦平和の市民運動でした。この時期に、今で言う「アート・アクティヴィズム」の先駆けのような活動が広島で花咲いていた、という事実はとても重要な意味を持つと思っています。200枚近く父は描いたそうですが、現存するのは父のアトリエに残されていた8枚だけです。

その後、広島で「平和美術展」を創設、世界的キャンペーンに発展する「市民が描く原爆の絵」への全面協力、ベトナム、アフガン戦争など、アートを通じた反戦平和活動。「母子像」シリーズ、『おこりじぞう』など子供向けの絵本の挿画。数々の「反戦詩」の発表。死ぬまで行動は一貫していました。『絵本おこりじぞう』に関しては、父を心から敬愛し、その朗読をライフワークにされていた俳優の木内みどりさんが急逝された事は、本当に無念な事でした。

父はいつも「自分の絵は眺めてもらうのではなく反戦平和のために活用して欲しい」と言い続けてきました。有難いことに、特にアメリカで父の作品を大学の授業で活用する動きが進行しています。『敗北を抱きしめて』でピューリッツァー賞を受賞されたMITジョン・ダワー名誉教授が作られた、歴史を文字だけでなく画像で学ぶための‘Visualizing Cultures’という歴史教育のサイトの中に、被爆の実相を描いた父の絵が36枚掲載され、世界各国から核兵器の惨禍を学ぶために大学や高校で活用されています（注1）。このMITに掲載された絵の一部は、イギリスの代表的平和団体で、ピースマーク作ったことで著名なCND（Campaign for Nuclear Disarmament）でも教材として活用されています。また、アメリカで最も民主的大学の一つと言われるオーバーリン大学で父を研究されているアン・シェリフ教授が作られた父の作品と人生を紹介するサイトは、主にアメリカの様々な大学で、アートで社会変革を目指した平和運動の事例として授業に活用されています（注2）。このような作品の「活用」のされ方は、父として、恐らく最も嬉しい動きでなかったかと思います。

また私事で恐縮ですが、この度、『反戦平和の詩画人 四國五郎』（藤原書店）と題する本を出しました。「評伝」というより、戦争を体験し、その後稀有な人生を生きた父を最も近くで見続けた肉親による「観察録」のような本です。父の人生を一言で括ると「反戦」と要約できます。その思想のために、四國五郎という表現者が何を考え、何を成し、何を成し得なかったのか。今を生きる我々が、戦争を少しでも遠ざけるため、個人として、何が出来るのか、何をすべきか、何がしかのヒントになればと願っています。ぜひ、多くの方に読んで頂ければと思います。

（四國五郎の作品・情報などはFacebookアカウント「反戦詩画人・四國五郎」にて）

注1) "Ground Zero 1945 A Schoolboy's Story" [http://visualizingcultures.mit.edu/groundzero1945\\_2/gz2\\_visnav01.html](http://visualizingcultures.mit.edu/groundzero1945_2/gz2_visnav01.html))

注2) "Popular Protest in Post War Japan: The Antiwar Art Of Shikoku Goro" <https://scalar.oberlincollegelibrary.org/shikoku/index>



※本稿は会員外の方への編集部からの依頼記事です。

## 会員の刊行物

※編集部までご連絡いただいた会員の刊行物を掲載しています。みなさま、平和のための博物館関係で刊行されたものがあればぜひ編集部までご連絡ください。

- (1) 安齋育郎『安齋育郎のウクライナ戦争論』（自費出版、2023年6月）：A4版88頁フルカラー、普及価格200円（+送料）、申し込み先: [jsanzai@yahoo.co.jp](mailto:jsanzai@yahoo.co.jp)（名前・郵便番号・住所・電話番号・冊数を明記のこと）
- (2) 『ピースあいち研究会誌』第4号（ピースあいち研究会（戦争と平和の資料館ピースあいち）編集・発行、2023年4月）：「特集 戦後77年語り継ぎ活動のいま、これから」、執筆者24名、174頁。頒価1,000円+郵送料370円
- (3) 出原恵三「平和資料館活動と今日的役割－平和資料館・草の家」（『人権と部落問題』第971号、部落問題研究所、2023年5月）
- (4) 山根和代「反核運動と平和・人権教育」（Roman Rosenbaum & Yasuko Claremont 編『Art and Activism in the Nuclear Age』〔核時代におけるアートとアクティビズム〕Routledge社、2023年）
- (5) 山辺昌彦「日本の平和のための博物館における一五年戦争：常設展示の現状を見る（上）」（『前衛』第1028号、日本共産党中央委員会、2023年7月）

## 最近の出版物（会員以外）

### 1 平和博物館に関する出版物情報（会員が自分で紹介しているもの以外）

#### (1) 『はじめてのヒロシマ』（広島平和記念資料館啓発課、2023年）

広島平和記念資料館が作成している平和学習用教材のうち、小学校低学年向けの教材が新たに作成されました。36頁、全編カラーです。

### 2 平和のための博物館を対象とした研究

#### 2-1 研究論文

#### (1) 何偉偉「ボランティアから見る地域博物館の実践と課題－市民による平和博物館「ピースあいち」の事例から－」（『社会教育研究年報』第37号、名古屋大学大学院教育発達科学研究科社会・生涯教育学研究室、2023年）

#### (2) 勝村誠「ウトロ平和祈念館の展示を通して居住権について考える」（『立命館経営学』第61巻第6号、立命館大学経営学会、2023年3月）

#### (3) 廣田香「広島平和記念資料館対話ノートから見る原爆の記憶と死者」（『東北宗教学』第18号、東北大学大学院文学研究科宗教学研究室、2022年）

#### (4) ハリス田川泉「原爆投下をめぐる歴史解釈－すれ違う記憶とアイデンティティ」（越智郁乃・関恒樹・長坂格・松井生子編『グローバリゼーションとつながりの人類学』七月社、2021年） リニューアル後の広島平和記念資料館に言及

#### ⑤ 一戸信哉「沖縄県におけるダークツーリズム」（『敬和学園大学研究紀要』第32号、敬和学園大学、2023年）

対馬丸記念館、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄県営平和祈念公園（平和祈念資料館含む）の他、記念碑が多数紹介。また不屈館も紹介。

#### ⑥ 浅野璃子・伊藤穂香「wam(アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」)体験レポート」（『Sexuality』第109号、「人間と性」教育研究協議会、2023.1）

#### 2-2 単行本

#### (1) 伊藤純郎『アジア・太平洋戦争を問い直す』（清水書院、2023年）

沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、対馬丸記念館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、茨城の戦争遺跡を紹介

#### (2) 大妻ブックレット出版委員会編『ミュージアムへ行こう 知の冒険』（日本経済評論社、2023年） 平和博物館ではアクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（wam）と東京大空襲・戦災資料センターを、その他戦争関連では昭和館と平和祈念展示資料館（新宿）を2～3頁で紹介。東京中心。

### 3 戦争展示に関する研究

#### (1) 大参翔平「日本の戦争展示博物館の歴史と諸問題の整理」（『Museum study』第34号、明治大学学芸員養成課程、2023年）

#### (2) 馬曉華「グローバル化時代における和解構築の課題と挑戦－日中両国の博物館の戦争展示を通じて考える」（劉傑編『和解のための新たな歴史学－方法と構想』明石書店、2022年）

### 4 その他

#### (1) 山口百合子・堀越蒔李子企画・編集『学校とミュージアムの共創－平和教育と鑑賞プログラ



ム開発』(学校と共創する美術で学ぶ平和教育実行委員会(長崎県美術館内)、2023年3月)

【お詫びと訂正】第51号紹介の次の図書のタイトルが間違っていました。訂正します。

堀尾輝久著『地球時代と平和の思想』(本の泉社、2023年)

→堀尾輝久著『地球時代と平和への思想』(本の泉社、2023年)

## 自著紹介

※田中利幸氏(歴史家、在メルボルン)は非会員ですが、編集部より自著紹介を依頼しました。

### *Entwined Atrocities: New Insights into the U.S.-Japan Alliance*

出版社 Peter Lang 2023年3月20日

Yuki Tanaka (田中利幸)

私は2019年5月に、『検証「戦後民主主義」：わたしたちはなぜ戦争責任問題を解決できないのか』(三一書房)を上梓した。しかし、周知のように、日本では今や自国の戦争責任を厳しく追求するような内容の出版物の売れ行きはひじょうに悪い。天皇裕仁の戦争責任を真正面から問う議論を含む拙著のような本は、なおさら売れない。よって、本の値段の点からも、一定のページ数を超えないような本に限定しなければならなかった。

2020年の歳明けから、私はこの日本語の拙著をもとにしながらも、自分が長年考えてきた日本の戦争責任問題に関するさまざまな問題点を、出来るだけ詳細に分析、叙述する英語の著書の執筆にかかった。幸か不幸か、パンデミックのためにほとんど自宅に閉じこもり状態になった2年間で執筆に専念することができ、2022年の2月ごろまでに初稿を書き終えたが、原稿の長さからすれば、日本語著書の原稿の倍近くになってしまった。本書は序章と結論を含めて全部で11章から構成されており、序章と結論以外は3部に分かれており、各々がそれぞれ3章から成っている。第1部は「焼夷弾と原爆」、第2部は「平和憲法と天皇制」、第3部は「戦争の記憶と象徴(表現)」となっている。

長年、個人的な交流を通して多くの助言をいただいていたジョン・ダワー教授に原稿を送り意見を求めた。その結果、本の題名をEntwined Atrocities(絡み合った残虐行為)という題名にするようにとの助言を受けた。私がこの著書で最も主張したかったのは、日本人の戦争加害責任意識の希薄性は、米国が日本に対して犯した焼夷弾・原爆無差別殺戮という戦争犯罪に対する独特の被害者意識と複雑に絡み合っているのであり、その絡み合いを解きほぐさなければ、日本人の戦争責任問題は解決できないというものである。この本のタイトルはまさにその本の内容を象徴的に表している。ゆえに、ダワー教授のこの助言には深く感謝している。

その上、ダワー教授は、とても親切なことに、出版社向けに拙著の推薦状まで書いてくれ、これを自由に使って出版社を見つけるようにと、とてもありがたい力添えをいただいた。そこで、スイスに本部を置き、米英欧州の主要諸都市に事務所を開き、英独仏の3カ国語で人文・社会科学分野の学術書を広く出版しているPeter Langに、ダワー教授の推薦状を添えて送った。原稿が2人の専門家の査読の結果、全くカットなしで全文をそのまま出版するという嬉しい結果となった。

ダワー教授の推薦状は拙著の内容を、著者自身がとても書けないような、素晴らしく簡潔な文章で纏めているので、たいへん僥越ながら、その推薦状の一部を和訳して紹介させていただく。

「Yuki Tanaka (田中利幸) の今回の著書は、これまでの彼の研究にとって重要な要素であったいくつかの枢要な問題を密接に関連づけるという点で、真に独創的である。一つは、日本の残虐行為と戦争犯罪である。もう一つは、米国の戦略的核攻撃による民間人殺害の犯罪性である。第三は、天皇の戦争責任に関する戦後直後の日米両国による隠蔽工作（そしてこれがアメリカの空爆の非道な性質の隠蔽工作とどのように結びついているか）である。第四に、この二重の隠蔽体質が、いわゆる平和憲法（1947年施行）に固有の矛盾を生み出し、それが現在も改正されずに残っている。最後に、このダイナミックな連関を理解することで、現在の日本の民主主義の欠陥と失敗をよりよく理解することができるという点に焦点を当てる。このような複雑かつ密接な比較分析は、現代の日米研究において前例がない。これは間違いなく、真剣に耳を傾けるに値する。」

この推薦状の全文を拙著の「前書き」として使用することにもダワー教授に快く承諾していただき、感謝に絶えない。

最後になったが、本書の表紙の絵について簡単に説明しておきたい。この絵の作者は、近年ひじょうに注目が高まっている四國五郎氏（1924-2014年）の作品で、実は山口勇子 原作/沼田曜 語り文/四國五郎 絵 『おこりじぞう』（金の星社 1979年）の絵本に使われている絵である。実際にスケッチしたものではなく、四國五郎氏の想像に基づいて描かれており、右端下に描かれている野花は、完全に破壊され全てが瓦礫となった広島に植物が再生しているという状態に、あらゆる生命の復活への望みが象徴的に表現されている。この絵を拙著の表紙にぜひ使用したいという私の強い希望に対して、四國五郎氏の御子息と御息女である四國光、松浦美絵のご両人からの許可をいただき、さらに金の星社からも寛大なご配慮をいただき、使わせていただいた次第である。心から感謝を申し上げる次第である。

この出版報告の読者の方たちの中に、英語圏で拙著に興味のあるような人をご存知であれば、情報を拡散していただければたいへんありがたい。値段が高いので、大学関係者の方には、大学図書館で購入していただくようなご配慮をいただければ光栄である。

Peter Lang : <https://www.peterlang.com/document/1285367>

Amazon : [https://www.amazon.com/Entwined-Atrocities-Insights-U-S-Japan-](https://www.amazon.com/Entwined-Atrocities-Insights-U-S-Japan-Alliance/dp/143319953X/ref=sr_1_1?crid=UQ74NYE2CAZP&keywords=Entwined+Atrocities&qid=1668179658&sprefix=entwined+atrocities%2Caps%2C243&sr=8-1)

[Alliance/dp/143319953X/ref=sr\\_1\\_1?crid=UQ74NYE2CAZP&keywords=Entwined+Atrocities&qid=1668179658&sprefix=entwined+atrocities%2Caps%2C243&sr=8-1](https://www.amazon.com/Entwined-Atrocities-Insights-U-S-Japan-Alliance/dp/143319953X/ref=sr_1_1?crid=UQ74NYE2CAZP&keywords=Entwined+Atrocities&qid=1668179658&sprefix=entwined+atrocities%2Caps%2C243&sr=8-1)

なお本を紹介したサイトをご覧ください。

5月25日に東京の外国人特派員クラブで行われた私の出版記念講演の録画が、Youtube に載せられています。1時間ほどの短い時間でしたので、拙著 *Entwined Atrocities: New Insights into the U.S.-Japan Alliance* の（序文と結論を含む）11章のうち3章の部分で取り扱った幾つかのテーマに、ごく簡単に触れるだけしかできませんでした。よって、どこまで視聴者のみなさんに私の考えを十分理解していただけるかどうか分かりませんが、ご視聴いただき、ご批評、コメントをいただければ光栄です。(suizentanaka@gmail.com) 英語圏に講演内容に興味を持ちそうな知人や友人をお持ちの方は、情報を拡散していただければありがたいです。 <https://youtu.be/AoBaZyxGV2g>

## 海外より

### トロント(カナダ)のホロコースト博物館が、 2023年6月にリニューアル・オープン

安井 亮 (博物館研究者)

2023年6月9日に、カナダ最大の都市トロント（都市圏人口：638万人）にある、ホロコースト博物館が大々的なリニューアルを終えて、再オープンした。同館は、1985年9月23日に、もともとノイエバーガー記念ホロコースト教育センターとして開館し、ユダヤ人の歴史とホロコーストの歴史的事実を後世に伝える、博物館活動を続けてきた。創設者のひとりであり、建設費の大部分を寄付したチャイム・ノイエバーガー（1926-2012）も、ポーランド東部のチョルトクフ出身（※チョルトクフは、現在ウクライナのチョルトキウ）のポーランド系ユダヤ人であり、第二次世界大戦直後に、孤児（家族全員は、ナチ・ドイツとソ連軍によって殺害）としてカナダに移住し、すぐに建設業に就き、後年はトロントの不動産王として成功した。

ホロコースト博物館が開館した当初、カナダにはホロコーストの体験者がまだ多く生存していたが、2020年時点における体験者の数は、ほとんどが他界するまで激減し、ホロコーストの歴史的事実を後世に伝える使命をもった、同館は強い危機感を感じた。カナダに住むユダヤ人は約40万人を数え、その半数がトロントに住んでいることから、その危機感は相当なものだった。そうした社会背景と、近年顕著になってきた、カナダ国内の反ユダヤ主義の高まりに対して、開館以来の展示と活動を大々的に見直し、施設も拡張されて再オープンにこぎつけた。館名も、この機会に、トロント・ホロコースト博物館に改称した。所在地は、トロント北部のノースヨーク地区。

【名称】 The Toronto Holocaust Museum.

【公式ホームページ】 <https://torontoholocaustmuseum.org/>

【ニュース】 <https://www.youtube.com/watch?v=MWGdtXy8xl4> ※トロント市にホロコースト博物館がリニューアルオープンしたというニュース

### 国際ピースポスターセンターの40年（1981-2021） ：一つのコレクションと多くの経験

ヴィットリオ・パロツティ（ボローニャ、2023年4月）[山根和代訳]

「ポスターがすべてを物語っている」

—ロバート・フィスク 『インディペンデント』誌 2012年11月6日付

#### 始まり（1980-1987）

1985年3月11日：ボローニャ市役所のあるパラッツォ・ダクルシオのヘラクレスの間で、ボローニャの4つの平和主義グループ（反軍国主義・非暴力不服従協会-ADN、良心的兵役拒否同盟-LOC、市民ボランティア自治グループ-GAVCI、軍事費に対する良心的兵役拒否-OSM）によって組織された「戦争と軍拡競争に反対し平和と非暴力を教育する第一ボローニャ展」を開いた。

コレクションの原型は、西ヨーロッパがクルーズミサイルやパーシングIIミサイルの配備を控えていた70年代後半にさかのぼる。1979年、NATOがユーロミサイルの配備を決定し（これに対しソ連は東欧の共産

主義国にSS-20ミサイルを配備)、最初の平和デモが始まった。しかし、ヨーロッパで平和活動が本当に「勃発」したのは1981年であった。ヨーロッパの首都で行われた最初の大規模な平和デモや、東西両欧のすべてのミサイル(核弾頭付き)に反対する無数の地域的な取り組みに刺激され、当時、作家のカルロ・カッツラが設立したイタリア単独軍縮連盟の活動家として、私はイタリアとヨーロッパを旅するようになった。ポローニャに戻るたびに、さまざまな量のポスターやリーフレットを持ち帰ってきた。

それらのポスターは、核兵器再軍備に反対する民衆の意志を、鮮明に、力強く表現したものだだった。遅かれ早かれ、これらのポスターは、a) 私たちの歴史の重要な部分を思い出させ、b) 私たち全員がこれらの出来事から学ぶべきことがたくさんあることを教えてくれるだろう。まず、これらのポスターは、それらの大量動員運動の重要性と強さを示すと同時に、その限界も示している。特に、その数だけでなく、その質、影響力、民衆の参加の度合いを考慮するならば、これらのポスターは、想像もつかないような地域レベルで組織されたイニシアティブが大量にあったことを証明しているのである。第二に、反軍事主義運動や非暴力主義運動が、数の上では少数派の立場でありながら、アイデア、経験、提案の面で大きな貢献をしたことの影響と可能性を示すものである。

第1回ポローニャ展(その後、1986年と1987年の2回開催)の前夜、私たちは約200枚のポスターを手にした。それを使う時が来たのである。第4回「良心的兵役拒否国民運動」の始まりに、これ以上ふさわしい機会があるだろうか。そこで、1984年秋に「反軍事主義・非暴力不服従-ADN協会」を立ち上げた友人や仲間の活動家たちによって、約5年間の潜伏期間を経て、ポスターコレクションが誕生した。この協会は、パオロ・マウリツィオが編集した雑誌『Quaderni dell'ADN』を謄写版で発行し、非暴力の問題やイニシアチブに関する知識を構築し、広めることに重要な貢献をしていた。

私たちは、このコレクションが、充実し、多様であるとはいえ、広大な平和主義者の「群島」のごく一部に過ぎないことに気付いた。そこで私たちは、「常設平和ポスター資料センター」を建設するために、個人や団体を問わず、ポスターやリーフレット(使用後はほとんど紛失したり廃棄されたりする)を提供し、その拡大に貢献するよう求め始めたのである。この呼びかけはすぐに反響を呼んだだけでなく、多くの既成のグループや団体から、地元の展覧会のためにポスターを貸してほしいという依頼が来るようになったのは、このポスターが関心を呼んでいることの明らかな証である。

1986年の第2回ポローニャ展では526枚、1987年の第3回展(第2回展と同じくレエンツォ宮殿で開催)では800枚を超えるポスターが展示された。この時点で、この種のコレクションとしてはイタリア最大の規模を誇っていたのである。このコレクションは、歴史的・文化的な価値だけでなく、教育的な価値も持っていた。

トレント市の良心的兵役拒否者のグループが、1984年秋にイタリア初の平和ポスター展を開催したことが、コレクションの拡大に大きく貢献した。このことを知った私たちは、第1回ポローニャ展に先立ち、トレントに出向いて数十枚のポスターを交換し、ポローニャ展をより充実したものにした。その中に、同じ年の1984年春にロンドンで、ロンドン管区政治委員会が「第1回国際平和ポスター展」を開催したことを知らせるポスターがあった。つまり、私たちのポローニャ展は、イタリアで2番目、世界で3番目の展覧会ということになる。

第2回ポローニャ展は12日間開催され、約5,000人の来場者があった。ポローニャ展の最初の2年間、イタリアの30都市で36の地方展が開催され、そのうち9つの地方都市(うち5つはエミリア・ロマーニャ州外)は首都であった。

1987年、この展覧会の最初の総合カタログを出版する時が来た。『なぜ?-平和と非暴力の教育のための戦争と軍拡競争に反対するポスター展のカタログ』(150ページ、162図版)で、オマー・カラブレゼ、レティツィア・グラッシら学者や大学の研究者たちが寄稿し、ウンベルト・エコのインタビ

ューが掲載されている。私は4カ国語の総合抄録を完備したカタログの紹介文を書いた。

### その後の展開（1988年～2011年）

1988年以降、当コレクションのポスターは、当協会、文化、政治、社会、宗教団体、地域の施設、学校、大学などが主催し、イタリアとヨーロッパ各地で230以上の展覧会に出展された。会場も、廃墟となった教会、要塞、城、スーパーマーケット、高齢者施設、レジャークラブ、タウンホール、学校、大学など、実にさまざまです。2002年にはヴィアレージョ・カーニバル財団の会場のひとつで、2006年にはヴァルモンターネ（ローマ）で開催された世界花火選手権で、展示が行われたこともある。1993年、ADN協会は、非暴力の取り組みと並行して、平和ポスターの収集、目録作成、プロモーションという最初の活動を開始した。これが活動の中心となったため、名称と規約を変更し、「Centro di Documentazione del Manifesto Pacifista Internazionale/国際平和ポスター資料センター（CDMPI）」に改称することを決定した。

90年代半ばからは、CDMPIが所蔵するポスターの中から、テーマを決めて巡回展を開催するようになった。その頃、ニュルンベルク平和博物館館長のビルギッタ・マイヤー氏、さらにブラッドフォード大学（英国）平和学部の平和主義史講師で平和博物館国際ネットワークのコーディネーターであるピーター・ヴァン・デン・ドゥンゲン氏との共同作業が始まった。この街には、イギリス初の平和博物館がある。

1990年代後半から2000年代前半にかけて、CDMPIは新たな地平を切り開いた。1999年、カタールニアに拠点置く「Stop the War」協会と共同で、史上最大のポスター展を開催した。450枚のポスターは、カタールニア県の7つの市町村で開催された7つのテーマ別の展示会に分けられた。すべての展示がノルマン時代の要塞や城、ブルボン家の監獄で行われたことから、この取り組みは「平和の要塞」と名付けられた。

翌2000年、ボローニャ市は「コミュニケーション」をテーマにした9つの欧州文化都市にノミネートされた。CDMPIは、このイベントの組織委員会に、100枚のポスターからなる大規模な巡回展「ヨーロッパの都市の壁に描かれた平和の50年(1950-2000)」(1)を開催する計画を提示し（後に承認、資金提供）、付属のカタログとともに、過去50年間のヨーロッパの平和運動のストーリーを紹介した。第3のミレニアムの初期、当時ボローニャに拠点を置いていたCDMPIは、カーザ・デッラ・ソリダリエタ「アレクサンドル・ドゥブチェク」(2)に拠点を置くカサレッキオ・ディ・リノ（ボローニャ）のPercorsi di Pace（平和の道）協会-PDPと有益なコラボレーションを始めた。2004年2月、両協会はブラッドフォードの平和博物館が開催したノーベル平和賞創設100周年記念の大規模な巡回展を推進した。2006年、CDMPIとPDPは事務所をカサレッキオのCasa per la Pace La Filanda (La Filanda House for Peace)に移転した。この建物は、第二次世界大戦中に一部が破壊された元繊維工場である。

その際、CDMPIはコレクションの管理を続けながら、当時約2,600点あったコレクションをカサレッキオ・ディ・レーノの自治体に寄贈することを決定した。

2000年代の最初の20年間、CDMPIは平和のための博物館国際ネットワークが主催する4つの会議に参加した：オステンデ（ベルギー）（2003、第4回会議）、ゲルニカ（2005）、バルセロナ（2011）、ベルファスト（2017、第9回会議）である。これらの会議のうち最後の2回で、私はそれぞれ以下の講演を行った。「平和のための博物館：カサレッキオ・ディ・レーノ（ボローニャ）のCasa per la Pace La Filandaのポスターコレクションからのイメージとテーマ」、「平和のための教育および平和のための博物館における平和ポスターの役割」を、スライド付きで説明した。

これらの会合の中で、CDMPIは、ブラッドフォード平和博物館のクライヴ・バレット氏、ゲルニカ平和博物館館長のイラチェ・モモイシオ・アストルキア氏をはじめとするヨーロッパのネットワークメンバーとの強固な協力関係を構築し、また、ヨーロッパ以外からも、京都の立命館大学の山根和代

氏やニューヨーク大学のジョイス・アプセル氏、ウズベキスタンのサマルカンド平和博物館のアナトリー・イオネソフ氏と連携した。

### この10年：2011年～2020年

この10年間で、CDMPIの活動はさらに発展している。2020年に、1985年からこれまでに開催されたポスター展の全リスト（約300件）が作成され、いくつかの気付きがあった。まず、長年にわたって開催された地方展の数が徐々に減少しているが、それを補って余りあるほど、展覧会を依頼したいいくつかの組織や開催された会場の名声と地位が高まっている。例えば、

- ニュルンベルク平和博物館(2008年)
- ボローニャ大学（2006年、2009年）
- ボローニャ・ゲルマン文化研究所（2009年）
- ニューヨーク大学フィレンツェ校（Villa 'La Pietra'にて）（2011）
- ボーゼン・ボルザノ大学（2012年）
- ペルージャのサン・マッテオ・デッリ・アルメニ図書館(2015年)
- コミソ（ラゲーザ州）のブファリーノ財団（2016年）
- モデナ市欧州政策・国際関係局（2017年）
- アテネのヘレニズム議会（2018年）
- ジェノヴァのドゥカーレ宮殿（2019年）

この10年間、CDMPIは「出版」活動も続けており、『ピースポスターが語る...戦争をなくすためのさまざまな方法』（3）という本に、さまざまな記事やエッセイが掲載された。また、2017年には、2つの月刊定期刊行物とのコラボレーションを開始した。カサレッキオ・ディ・レーノ自治体の『Casalecchio news』と、Percorsi di Pace協会の『Che succede』である。このコラボレーションでは、『La Filanda』のポスターを毎月1枚、関連する解説文とともに掲載している。これまでに発行された33枚のポスターは、Fiorella ManziniとVittorio Pallottiが編集した2冊の小冊子にまとめられている。1冊目は『Un manifesto al mese: 2017-2018』と題されている。Storie vissute di pace e nonviolenza (A poster a month: 2017-2018. Lived stories of peace and nonviolence) (4)では、15枚のポスターが掲載されている。同じタイトルで18枚のポスターを掲載した2つ目は、2019年から2020年の2年間に掲載されたポスターをまとめたものである。どちらもCDMPIのウェブサイト（[www.cdmpi.it](http://www.cdmpi.it)）でデジタル版として、また印刷版として出版されている。同じタイトルの3冊目（124ページ）には、2021年から2022年にかけて発表された他の16枚のポスターが収録されている（4）。

「出版」領域での活動に加え、過去10年間、CDMPIは以下の取り組みに積極的に協力してきた。

— 書籍『Abbasso la guerra - persone e movimenti per la po』の出版。

フランチェスコ・プグリエーセ著『Down with war - people and movements working for peace from the 19th century to today 戦争はやめよう-19世紀から今日まで、平和のために活動した人々と運動』（2014年）(5)；

— ジョイス・アプセル著「Introducing Peace Museums」の出版(6)。

カーサ・ペル・ラ・パーチェ・ラ・フィランダは、本書で検討されている世界6大美術館の一つとして紹介され、第6章（pp.168-191）でオスロの「ノーベル平和センター」と並んで紹介されている。アプセルは、この2つを一緒に考える理由を次のように述べている。「オスロでは "センター"、カサレ

ッキオ・ディ・レーノでは "平和の家" と名付けている。オスロではセンター、カサレッキオ・ディ・リノでは平和の家と呼んでいる。平和教育は両者の目標の中心であり、両者とも平和の文化を促進するものであると認識している。ノーベル平和センターは、有名で人気のあるノーベル平和賞受賞者とその作品に重点を置いており、カーサ・ベル・ラ・パーチェのポスターコレクションは、非暴力と抗議の、より過激で政治的、活動的な伝統から生まれたと、それぞれ異なる平和史の伝統から生まれている。」

- ペルージャ-アッシジ平和行進に参加し、専用の案内所を設置；
- 地元で開催される平和イベントへの参加；
- ボローニャとイタリア全土の他の都市で、『Peace Posters Tell a Story...戦争をなくすためのさまざまな方法』という本を紹介する；
- ラ・フィランダの紙文書アーカイブの保存と普及。2015年5月6日、イタリア文化遺産・活動・観光省から、「アーカイブ」は、それを補完する「ポスターコレクション」とともに、特に重要な歴史的価値を有すると認められた。研究者や学者によってさまざまな機会に利用されてきたこのアーカイブは、書籍『La possibile utopia』の中で十分に引用されている。La possibile utopia. Per una storia dei movimenti pacifisti a Bologna nel secondo Novecento (The possible utopia. 20世紀後半のボローニャにおける平和運動の歴史) (7)；
- ボローニャのグラムシ研究所との最初のコラボレーションで、約1,000枚のポスターのスキャンとウェブへのアップロードを行った。2013年からは、Percorsi di PaceのFausto Giorgi氏とのコラボレーションにより、さらに多くのポスター（3,000枚以上）をスキャンしている；
- 2018年12月に5,406枚だったコレクションは、現在では約7,000枚に増え、2010年のThe Oxford International Encyclopedia of Peaceでは、世界最大の平和ポスターのコレクションと評されている (8)。

また、ヴェローナのCasa della Nonviolenza（非暴力の家）、ブラッドフォードとニュルンベルクの平和博物館、ボローニャのUnione Donne Italiane（イタリアの女性組合）とCentro Documentazione delle Donne（女性の文書センター）、ローマのGiorgio Giannini、カメラノ（アンコーナ）のMassimo Berti、フィレンツェのAlberto L'Abate family、デルフトのThe dutch Vredesmuseum（オランダ）からの多額の寄付によりコレクションが成長したのである。

## 教育現場でのポスターの活用例

ポスターは、ある歴史的な出来事や人物、状況について語るメッセージを表しています。このメッセージを読み、理解し、解読するために、さまざまな年齢の生徒のための教材と、生徒自身や教師、大人のユーザーのためのファクトシートが用意されています。元中学校の美術教師であるフィオレッタ・マンズイーニの経験とイニシアチブにより、ポスターは80年代から学校でさまざまな教育活動に使用されています。

- テーマに沿った展覧会の開催（ワークシート付きもあり）
- 生徒や教師が選んだテーマで、新しい展覧会の準備に協力する。
- 歴史、グラフィックアート、経済、法律など、さまざまな分野のトピックをより深く掘り下げるために、ポスターを活用する。
- グラフィック、アート、心理学、教育学、社会科学を専門とする高校の生徒や大学生を対象に、コレクションが収蔵されているカサレッキオ・ディ・レーノのCasa per la Pace La Filandaやその他の関連施設でのインターンシップや研修の機会を提供する。

ーモデナのヴェンチュリ芸術高校のグラフィックデザイン教師マルコ・レガ氏とのコラボレーションにより、CDMPIのロゴをデザインし、生徒のコンペで選ばれた。

## まとめ

過去35年間にイタリア国内外で開催された300の展覧会では、数千枚のポスターが公開され、数万人の幅広い年齢層の人々が訪れた。このことが、多くの若者やそうでない人々の間で、平和と非暴力の文化を発展・成長させることに影響を与えたことは間違いないだろう。

レンゾ・クレイゲロが『Un manifesto al mese: 2017-2018 - storie vissute di pace e nonviolenza』のあとがきで書いているとおりです。「…したがって我々のようなデジタル時代であっても、ポスターを探し、収集し、保存し、宣伝し続けることがいかに重要であるかは、明らかである。一時的で儚いコミュニケーションの道具として考えられたポスターは、平和主義の歴史を記録するための主要な資料である。運動、行動、思想は、暴力や武力紛争が蔓延する現実とは異なる現実を表している。ポスターを「読む」ことによって、私たちは平和を求め、…より公正で連帯に基づく社会の実現に取り組む人類を知ることができるのである。」

### (参考文献)

1. Pallotti Vittorio (ed.), 50 anni di pace in Europa - eventi e immagini, Centro di Documentazione del Manifesto Pacifista Internazionale, Bologna, 2000, pp.110.
2. Casa della Solidarietà 'A. Dubcek' ('Alexander Dubcek' House of Solidarity) は、1991年に戦闘機が制御不能になって建物に衝突して破壊された旧高校 I.T.C. "Salvemini" の再建から誕生した。この悲劇による犠牲者は、死者12名、負傷者88名であった。
3. Pallotti Vittorio and Francesco Pugliese (eds.), Peace Posters Tell a Story... of the many ways to get rid of war, Grafiche Futura s.r.l., Trento, 2014, pp.200.
4. Manzini Fiorella and Pallotti Vittorio, Un manifesto al mese - Storie vissute di pace e nonviolenza: 2017-2022, published by CDMPI, Casa per la Pace 'La Filanda', Casalecchio di Reno (Bologna), 2022, pp.124.
5. Pugliese Francesco, Abbasso la guerra. Persone e movimenti per la pace dall'800 ad oggi, Futura/Helios, Trento, 2013, pp.176.
6. アプセル・ジョイス Apsel Joyce 『平和博物館の紹介』ラウトレッジ、ニューヨーク、2016年、220頁。
7. ローバ・ロッセラ、La possibile utopia. Per una storia dei movimenti pacifisti a Bologna nel secondo Novecento, Edizioni Aspasia, Bologna, 2013, pp.192.
8. Oxford International Encyclopedia of Peace, N. Young (ed.), Oxford University Press, Oxford, 2010, vol.2, pp.83-85.

### 【編集後記】

『ミューズ』日本語版第52号をお届けします。次回で英語版が50号となるので、お祝いのメッセージが届きました。それを日本語版にも掲載しました。なお館の発行した書籍、資料集、パンフレット等は、ぜひ活動紹介してご紹介いただきたいのですが、情報を編集部にお送りいただければ「新刊紹介」の中でご紹介いたします。ぜひ情報をお寄せください。また、活動紹介にとどまらない時評・論考・展示見学の感想などもお待ちしております。展示紹介は500～1500字程度、展示風景等の写真を1～2枚付けていただくとありがたいです。時評・論考等は1500字以上でも構いません。ご相談ください。(編集委員／福島在行)